

K-13

912.4
Ti238i2

今宮の心中
最明の巻
卯月の巻
上

近形門左衛門作
武蔵屋茶版

912.4 7:258 22

二郎兵衛 おさき 今宮の心中

近松門左衛門作

大正七年正月三日 初興行 作百五十八頁

ゑいゝゝゝゑいゝゝ、月見花見は何所も同じ、諸國名所のうの中々に、類浪花の舟遊び
 老も若いも下人も主も、男女がござゝゝ船に袂涼しき川風は、秋と云ひても虚でないよの
 いぢやれであいの本町橋と、漕出て見れば天満川、市の側なる初甜瓜買ふて冷してひい
 やりと、爪と二ツに打割ば似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に映らふ影と水汲が、汲
 で荷ふて持や桶の棒、坊主頭と振立て、道正坊の金柄杓、あれあれ撫て通れば一撫に、は
 や本復の伊丹酒茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様のさま
 トと一時に見る舟遊び、是常になきか肴と一とつ勘じる盃や、然れば船のせんの字と
 君にすゝむと書たり、船の屋形に三味弾ば納屋に油の臼と引、はしのいよ此橋のうへに
 て賣る聲は、煙管團扇煙草入役者 評判扇賣、浪花藝者の風俗と橋々名所に擬へて、畜集
 めたる藻鹽草、いせおの海士に有らねども其は秋野八重桐と融井橋じやとおしやる、心
 はの、先はかたびの神のけて、跡先に又續く者がないは扱、袖島源治は新靴じやとおしや

今宮 心中



337106

る、それ何故に、鹽物町のしたゝるたる、然も蘇には骨が有るといひ、桂木常世はゑのこ
 じまとよ、なせくゑのころく抱寄せて手筒に愛らしや、扱又嵐三十郎うつは座橋
 とおしやる、心はの、何の料理に遣ふても仕出しが甘い扱、櫻山庄左衛門福島じやとお
 しやる、心はの、小体なれども張詰て舞臺一はいのさも有り、蘇に味も有る口中のしより
 くしたるすゝめずし、夫でたでばの何所やらがひりゝとするとぞ答へける、音羽二郎三
 と雑魚場とは、鱈が有るとの譬のや、上村吉彌は伏見堀じやとおしやる、義理はの、舟板
 町の舟板の末には沖に乗出し、帆と充分のしるしとて今なら人や焦るゝと云ふと、扱市村
 玉がしは梅田橋と見立たり、夫何故に、はて渡れば色町越れば火屋、濡にも愛にもよふ
 つるは扱、杉山平八と四ッ橋とは是をふじや、江戸のらも京のらも四方へ引つり引張た、
 踏ばたのつて山村かくはつと擽げた兩足は、百間堀と思ひ出す、善悪二ツと嘴分けて、り
 くぎと糺す芝崎に思案橋と思ひ出す、篠塚二郎左と見る時は大佛島と思ひ出す、三代續く
 奴風嵐が風俗と譬ふれば、其江戸堀と思ひ出す、嘉十郎が貌付に炭屋町と思ひ出す、敵
 は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切で返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す、思ひ出し

く陳ね行く、先是迄が片おもて、裏の御堂もろだくと立賣堀と漕廻し、辨當濟は腕家
 具も、釜もちやくく洗屋橋、跡へはんなり入花の茶びんを橋はこちくと、寄よく
 濱原の瓦町橋にぞ着にける、菱屋介五郎は如法なる氣も丸頼宗爾に、申し婆様母様、此泳
 き日の馳走より亭主由兵衛さを草臥、暮も近し是をらお上りなされと有りければ、隠居の
 貞法七十三眼鏡いらす杖つゝす、齒は一枚も抜目なき男勝りののみ様にて、それく是
 由兵衛、念の入た馳走でいひ慰、此方の内から出た人が、店一軒の主に成り商賣もし
 にせて、親方一家と響應とは此方ともくはいけい其身の手柄、然りながら女房が無れば、
 人の世帯は落付ぬ、身代薬の女房と早ふ持て落つきや、左様でないのと有りければ、内儀
 も共に打笑ひ、何故に女房持やらぬ、但何所ぞに思ひ入がな有るのいの、由兵衛思ふ圖に
 乗りて、誠に今日はお心よふお遊びなされし忝なさ、其上女房の事までお尋ね、御意の
 通り些思ひ入御座れども、此女房がいさやすみていきにくい、とよでのみ様おゑ様のお目
 と借ねば参らぬと、はて此方連が云ふて濟事ならば氣も入らひで何とせふ、其思ひ入の名
 は何と云ふ誰ぞいの、由兵衛殆ど笑盡に入り、ナ有難い忝ない三度禮拜仕る、名と申せ

ばつい御存じ去れども、先唯今はお名とばを申すまいよのしやんく、是のらが本酒、
亭主のら又はじめ、憚りながら介様へ、お肴にござ殿一節頼むと云ひければ、介五郎歪
うけ申しの、様、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴て来て、彼れが好の心中と語らそもの
、去ればいの切てきさが居たらば、祭文と聞ふものと、云へば由兵衛興醒顔、二郎兵
衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申したの、きさも一所に二郎兵衛と連れだつて参つ
たの、つがもない、きさは此比風ひいて頭痛がすると宿へ往たと、聞きもあへず由兵
衛、内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ、青二才の二郎兵衛り丁稚上
りの分として、母の年忌で候ふとて此忙しい最中に、十里ぢのひ法隆寺へうせさまが氣に
入らぬ、殊にきさが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ様に家と出で縁な事は仕出すまいと、
滅多無正に一人腹人も知らぬ心と苛ち、船辨慶に有らぬども、知盛が沈みし其有様に、又
由兵衛がしんきともやし、舟端蹴たて盃蹴わり前後と忘する斗りなり、菱屋一家の人々
は何の心も付ざれば、はや日も暮れた最早是のら歸らふと、上り支度と由兵衛危ないとは
些とも無し、挑灯用意致せしと取出せしが南無三寶、蠟燭と忘れた是久三、太儀ながら一

四

走り此通りの百貫町、四五丁往ばおきさの宿、定て知て、有ふを由兵衛が申、蠟燭一挺
貸てたも、些と氣色が能ならば鳥渡爰迄出たもと云て同道しておじや、序の内に氣と付
て誰もないの見廻しや、早ふく合點の心得ましたと帯もせず、絹絆一つの裸身や百貫
町へぞ走りける、昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛おきさと深き中入の、
南京綿の上へには手のない様に仕立口、在所はいなな横堀の知邊の元に隠れ居て、暮れば
其處へと通路の、仄に見ゆる彼の舟の屋形には、眞法様ねる様、舳には安東寺町の由兵衛
是ならぬ、躲しませふありや何様ぞや、菱の提灯久三が持て、跡のら來はおきさじや、
様子が無ふては叶はぬ等と、氣ももやくつて蒸暑き、材木納屋に立隠れ事の様とぞ窺ひけ
る、きさは程なく走り寄、是はく皆様今日はお慰みと、只今久三の物語私が氣色も云
々とは無けれ共、おみ様おる様へ頼み上す御訴事、直に是へ参りしも、おとましの
申出來まして、一倍氣合お當りますと、溜息吐て居たりけり、眞法も熟見て、此方へ訴
の事有とは何様した事ぞ、咄して見や成べき事なら聞いではと、左も懇切の詞の末、お馴
染として悉なや、昨日の暮の三田のら私しが父親登られ、幼少時のら在所で約束しとい

今宵心中

五

た、男の姑の頼ひゆへ急に嫁入と急いで来た、此度お暇申し請け、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分、御存じの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたいとは仕付ず殊に病者な身と持て、在所の手業がなんとして、夫故當座の間に合に内方ののみ様が御懇切に遊ばし、さうこうなした若い者共數多の中、ひとつにして此大坂で物の美事に映て遣ふ、必外へ約束すなと常々のお詞、是が反古に成る物の在所へとは歸るまいと、私は申します夫では親の一分が立ぬと、云ふての親子争論多分是へ見へませふ、私が口の合ふ様に在所の嫁入とお止なされ下されと、つぎつぎと語る下心、二郎兵衛は合點にて彼の云分は我故、男に親と見返る心中者めと、材木に抱付ぞくく悦び居たりける、親はとばく尋ねつぎ、養屋殿のお船は是の、ささが親三田の太郎三郎で御座ります、親仁殿の、それ酒進せ茶進せと、取々挨拶ありければいやお茶もたべました、定めてささめが咄でお聞きなされませふ、在所でなづけの方より、急ぐに欲いと申すにつき、中途ながら一生の身のため、道理立てお暇取れと申せば、在所へは往くまい大坂で男と持つと申す、夫は我儘親のまじよと背くると、叱つても聞き入れず、おれが男は内方ののみ様次第に任せて有、

是非とも親のこう言に在所の男持てならば、己や死るが合點の、娘殺すと云ふ事と大聲上げて泣かす、お主のお慈悲に御意見と頼みます、在所の婿と申すも喰兼ぬ身代、行きてれば彼奴が果報、世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事彼奴が喰ふは違ふて、大坂の男に喰付たの、やい其處な虚氣者、在所の男と大坂の男とて喰ふに二ツの味なし、一人の娘に親の身でもひない男と喰ふの、親の思ふ程にもないと涙と流し恨みける、おささも流石親心思ひやれども、二世のけて交せしとも捨られず、唯のみ様のお情と頼みますると斗りにて、同じく泣いて居る姿、眞法も不憚りに親仁の云分理が聞へた、去ながら彼のささが病者で、在所方の荒働さ一年と續くまい、身に藝もないこの銀の湧く手と持つて居る、二百目近ひ給分と唯の女子にのこふの、廣い大坂に男養ふ商賣とは彼れらが職、五人三人は針一本で樂々と過す手と持ちながら、山家在所へ頼ひに往ふとは、無分別のと思はる、此談合は取わいて、ささは此眞法にとんと預けて置てたも、此方の家にも子飼の者候る者がたんと有る、能い婿取つて後々は親達も大坂へ呼ぶ様に仕て遣ふと、念の入たる割口説、由兵衛扱は彼のささと我等へ隠居の心當、日頃の念願成就と是親仁、隠

居様へ任せて在所は變がいたがよい、此由兵衛も旦那の蔭で、安東寺町に手も擴ふ商賣し、手代の一人も遣のふて今日の様な饗應に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り、未だ女房も持ぬはのみ様へ、とんと任せて彼方の媒約待て居る、のみ様のお心で此方と私が頼身になり成るまい物でも御座らぬなふおささ左様じやないのと、云へどもおさは胸盡り、何様やら知りませぬと打傾ふきて居たりけり、太郎三郎一々に聞届け、おささが申した分ではさらく胃の腑に落ませぬ、のみ様のお御意ではつき致した御尤もく、親方の候らるゝと申すに先は幸一門中、何の子細も申すまい此上はおささが縁附は、何様なりとも最ふお暇と立んとすれば、由兵衛分別顔にて、是眞法様、是は大事の請取物おささも若い人の事、後日のもやく、驚し、ちよつと親子に手形させ、おさが縁付眞法様のお指圖背くまい、外ら一言邪魔させまいとの手形が取たい物と差込ば、眞法打領さ、是は由兵衛が云ふ通り手形と取つて置たい、夫でも父様無筆なり明日でも私がのみ様へ手形して上げませぬと辭退する程由兵衛、いやくたへと無筆でも判がなくは筆の軸、手形は我等筆取と煙草盆の硯引出し、はや書つける挑灯の蔭二郎兵衛見すまし聞すまし、彼奴が勤めて手形させ

八

のみ様隠してささや賞ふ分別、此判させては一大事何とせふぞ、石と打て挑灯と打消してのけん、石と尋ぬる其間に手形の文言思ふ通りに書濟し、是宛名は菱屋四郎右衛門様眞法様、親三田村太郎三郎印判と云ひければ御念が入つて忝ない、私の荷が下りましたと、巾着の印判くるくると、おさが我身も判とすや、いや私は印判持ちませぬ、左様なら父が裡判と、同じくすへて眞法様、いよく頼み上ますと差出せば、是では此方も如才がならぬと、珠數袋に納むる内二郎兵衛滑の石とあげ、由兵衛目がけて打石が舳板に當つて一はづみ川へさんぶと水散て、由兵衛一絞り夫を暴れ者が石うつはと、立上る所と續けて打てば由兵衛が頼み當つてあいたし是は危し、皆々屋形へおささも乗つて戸と立やと、無理無体に舟に乗せ親にも早ふ去つしやれ、負傷さつしやれなと云ひければおみや、是は目出度、おさが嫁入の談合に石打とは吉左右、目出度御座ると云ふ小鬘にはたと當れば南無三寶、こりや何様じや目出度過ぎて目が出たと抱へてこそは歸りけれ、猶も續けて打つ石に提灯も打破れ、由兵衛も敗もうしおささに心有る奴が、威傲のはくお紛れない船頭船とやつたも、久三おじや、此奴と踏んでくれふまのさつしやれと上ると見て二郎

兵衛横へされてぞ歸りける、由兵衛久三大汗にて何方へうせたくと、橋へ廻れば年頃なる浪人侍、髭奴の草履取何心なく來る所と、己奴覺へたると久三郎奴を橋へ横なげに、真向と四ツ五ツたゝみのけてくらはする、主人是はと立歸り久三と掴んで打つけ、踏つけ踏む所へ由兵衛駈つけ、爰にけつゝあるのよふ舟へ石打つたと、掴み付く手としりと取り、何さ石打たとは誰が事、慮外者めと云ふと見れば歴々の侍、よく御免なませ、人達で粗相致しました御免されて下されませ、お慈悲で御座ると泣叫ぶ何のお慈悲と拾上げ、向脚とはたと蹴返し是奴腸の出る程此奴踏め、任せておけると土足にのけ、うなよく身と打せたナ、覺へて居ると胸骨尻骨うんと踏めばぎやつと云ひ、うんと踏めばぎやつと云ひ目玉も出る斗りなり、もふよいはく、死ぬ程にしておけさ、此方へ來いと主従は優々として歸りけり、命のらく由兵衛あいたくと起上り、久三其所にあり、聞へぬぞや、今の様に踏居ると見て居やる筈は有るまい、此方が聞へぬ、此方故に最前くらはされたり踏れたり、振舞喰ふた斗りに言れぬ人の肩持て、阿呆くさい振舞が戻つた、御座れ戻ると立上る、其方は切て振舞と喰ふたが、此方は物入ふるまふて、あげくにした

る踏れた、向後應度すまい、御馳走が身の葦屋、酒持つて尻踏れたと獨言して歸りけり

中之巻

本町や新物店の若衆は、女とも見へず男なりけり女子交りの針仕事、つい一針が永き世の縁の端纏しどけなく、尻も結ばぬ糸櫻綻びのる太甚さよ、二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕事は常より精出せ共ささに拗強言佞言、乾反し直し上下と盤にのけて打けるが、是は糊加減の悪い袴じや、よそくの人の心の様に、彼方へはひつたり此方へはひつたり、移り易い胴根性なふかさ殿、此方が願てのみ様の肝煎で、安東寺町へ嫁入の時、此袴と婿殿に着せたらよる、其夜お石打れて小髪先割れぬ様に、抱締て居さつしやれいの、おきさ殿やいのおきさ殿う、チ、おしませしい、巴や鱈じや御座らぬ、是此私が仕立てる布子も、誰やらが氣によう似て、なんぼ直に縫ふても横へくといさゝる、聞分の無い物は此方に似合ふ着さつしやれ、私等が氣には入ぬと云へば、氣に入らずは打破つてのけたがよい、打破つてもだんないの、夫は何様して打破る、まづ此様に打破ると、棹振

あけて打盤ととんくく、何處やらの男とよそくの女と、渡らぬ先にとんくく、
 とんとんとど打にける、重手代口々にやい／＼はたへな、夫向ひの出現世のら旦那のわ
 せる見へぬると、云ふ所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話、なんと仙臺の
 注文は仕舞たる、秋田の荷と積たらば今橋へ往て銀請取りや、ヤト庵老は未だ見へぬり、
 ト庵が見へたら疾とせよ女子の手が薬じや、ささかに點へて貰はふし二郎兵衛に助手さしよ
 、手のふるはぬ様に仕事しまへ、残りのは出見世へいけと云ふ所へ、物もふ濫川ト庵御
 見廻申すと、つゝと入ればお出の待兼ました、先是へと上座へ通せばト庵、今日は廿三
 夜なれど一向宗はお構ひない、明日うらはつせん土用前一段とよふござる、おれ脈と見
 せよ、愚老の申た通薬喰となさるゝら、ういふ脈がよふなつた、玉子とまいる願し
 に左の脈がふはく／＼と打する、魚の中にも幽なとは大うんの物、兼て無用と申したよ
 もや喰ひはなされまい、右の脈がわたまがちなは若し桶木おは参らぬら、風氣もなし點
 と敷とふ硯々と云ひければ、奥で點と頼みませよ、是ささ二郎兵衛、油火灯して艾ともみ
 、先二三ひねつて置やと打伴れ奥に入りける、あつと云ふて二郎兵衛行燈灯しつ土器

あふり交出して揉んとするどささは立寄り胸倉とり、是れあんまりとやぞや酷いぞや、先度
 ろら染々と物云ふ間も無い故に、心底が語りたさ傍へ寄ればびりしやいと拗強の有じやう
 、安東寺町とは何事じや、嫌らしいく、是なふ誰しも此方の年榮では、十六七の振袖
 と好このむ最中に、四ツも五ツも年長の私に惚て下された、私や其心に打込で親兄弟も捨
 たぞや、在所は生れ古郷なり両親の傍に居る物が、往ともない筈はない何の由縁に大坂に
 、執心はなけれども此方と云ふ人に離れるが悲さに、お主と欺し親に背き身と狂はす心と
 、可愛やとも云はずに面白そうに拗強、コレ死んで見せよ死兼は仕ませぬ、二郎兵衛殿と
 抱きつき聲とも立す隠し泣、二郎兵衛もしはく／＼と、こらや／＼と背中と撫で共に涙と流
 せしが、先度の手形の文言は、何様ぞ／＼と云ふ所へ、ト庵奥より立出る、是はもふ
 お歸りなされますの、されば歸らふの、まそつと遊んでやひとぎやらの相伴せよの、やあ
 るいと煙草盆引寄する、二人は艾持へながら此首尾に語りたし、早ふ去ねがな／＼と
 腕けを去る氣色なく、なんと灸行言つけは無つたの、冷麥の素麵の、なまなの茶漬位にな
 らいつと戻つて寝てくれよ、内證知しやと云ひければ、ささは悦び差心得、旦那様は毒駒

で夜喰はわがらす、卜庵様へはつゝ茄子の淺漬で、茶漬進せと内儀様の言つけ、早ふ歸つて御寝なつたが増しで御座ると誰せども、何じや茄子の淺漬じや、一段よろらふ、夫れに出花とつけたらばと茶臼形になると見て、おささも呆れ寧ろ泊つて御座んせと、佛頂顔に二郎兵衛艾に火と付庭の隅、卜庵が石駄の裏物は試と煽ぎ立煽ぎ立てぞ煽らす、呪咀は理外にて卜庵氣にや徹しけん、是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたいもふ往まじよ、滅多に往たふなつて來た、まらつとお遊びなされませ、いや〜俄に往たふなつて足の裏がこそばいと、疊に足とすりつけ〜降ければ、二郎兵衛石駄とちつくと直し申卜庵様、旦那の眼も直りま升灸が早ふ驗ましたと、云共我身の上とは知す、卜庵が名人御覽あれ、一炷で驗が見へまじよと足の腫のさび悪げに石駄擦せて歸る、旦那の出来ぬ間に手形の文言早ふ聞たい〜、去ればいの文言は何様やら讀でも聞せず、宛名は菱屋四郎右衛門様眞法様、親子が印判しましたと語れば二郎兵衛はつと驚き、三、由兵衛めが文言と聞さぬは曲者、娘さよと由兵衛殿へ遣はさふと書たやら知れぬ、日比和女に心と盡す由兵衛め、何様こけても已奴が爲のよい様に書たは定、三田の親仁も粗相な、手形の文言吟味なしに判す

ると云様な、是後の邪魔とは其手形、さふぞ手形と盗んで破つて捨たい物じやと云へば、奇且にも盗むと云ふは恐い〜、錢銀の手形の慾徳になるにこそ、朋輩由兵衛との色づく旦那に損徳のゝらぬと、何時も彼の篋筒に手形ども置る、鍵はそこらに見ぬぬの何の爰等に置れふぞ、おる様のみ様旦那様、三人の外介さへさへ持されぬ、何時ぞ序にのみ様頼み文言見たがよいはいのと、云ふ所へ四郎右衛門なんとささ二郎兵衛、艾が未だ出來ずば向ひの出見世へいて、女房共にも燃つて貰へ、更ぬ先にしまひたいとふじや〜氣がせく、あい〜灸も皆出來ました、御勝手に遊ばしませ、そんなら爰で斯う向いて、それ二郎兵衛菓子盆、あられ煎豆さんせうに、こふ團敷けと捨くるりと灸のば、前後後に目は見へず何とせうとも顔いて、くすり〜の灸はし痴話の便りの薄煙り、十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男、手としめ身と撫で口と寄せ、誰と忍ばんさしも草是を因果の皮切なる、やう〜灸もすへおるす主人の帯の前巾着後へ廻る紐とけて、繋ぎし鍵は巾着より半分こぼれのりたり、二郎兵衛見つけて、篋筒に指しささに目成せ、天の與へと取んとすささは嫌じやと手と振れば、大事ないとて頭ふる、手とふる頭ふるひ〜、手と出し

手と引くから猫のおきといらふ危さや、申し旦那様熱くばらと押へましよ、いや熱うは
 ないが精がつきた、よい加減におきたい、まちつとでござんす夫最些じやく、夫やよい
 はと鍵引出は狼狽て、はしの灸と取落す熱やく、もふく是でしまはふ奥へ往てち
 と寝よう、二人ながら休んでくれ能ふ仕てくれた過分なと、悪事と知らぬ主の慈悲、仇と
 なつたる身の果の冥加に盡しも道理なり、二人は顔と見合せて鍵と取りは取たれど、主の
 目と晦ませば胸が慄ふて恐ろしい、誰ぞ来るの番しやと合せて見たる筆筒の鍵にあたるも
 地獄の錠前と、明て捜せど衣類の外は三原の合口時代の印籠、箱に入しは蓮如様の名號
 合點のいづね、手形箱は何時も土蔵へは入らぬが、戸棚に入たの知らぬと常見覺へし戸
 棚の鍵、なんの苦もなく戸と引明け捜せば一通上書に手形と有り、忝ない是が欲さの
 狂亂と、載さく二ツ三ツにひきささき、懷中に捻込で跡しまはんと爲る所へ、門と明けた
 は誰ぞ、だんない者と由兵衛上り口までつりくと、蔭と見るより二郎兵衛戸棚の内へ道
 入は、ささは前にひつとふて、由兵衛殿の、上らしやんせと後手にそるく戸棚と鎖にけ
 る、由兵衛とつくと見澄し、旦那は灸となされたげなと、つくと上つて是やなんじや、大

事の鍵をも取散し筆筒の口も明て有る、是おきさ退や、此世間物騒に戸棚の錠は何故ある
 さぬ、左らば錠も腰につけ錠とあろして置ませふ、マヤヤんとおろす錠の音、内に響
 けば消入る心地ささはわなくくと、直に死たい計りにて前後にくれてぞ見へにけ
 る、由兵衛ささが手とむすと取り、是おきさ、先度舟へ石打れた其疵が是未だ治らぬ、此
 打人が知れました、今夜旦那の戸棚へ入た盗人と同人、定めて此方も助けたらふ、戸棚
 と明けて沙汰なしにして遣り、旦那の耳へ入らう此方の心一ツじや、なんとくと云ひけ
 れば、手と合せて頼みます、日頃は恨も有る筈と打捨て其詞、生々世々迄忘れませぬ一
 生の内此御恩、何方してなりとも送りませぬと鍵貸んせ明けましよと、取付は押退け、
 マヤヤいこと云やんな、何時ぞくと今迄釣れたは何十度、此以前貴様が津山立三殿に奉
 公した時おら惚て居た此由兵衛、是非思ひと晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、寝る術
 も知たれども夫は戀とは言れぬ、此戸棚が明けたくば此首尾にのちよつと、身と汚して
 下されちよつとくと、取付は突放し通て廻れば追廻し、抱付く所とあた面倒なと突倒し
 、由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に能ふ判とさしやつたのふ、今其方と寝たらばなんじ

や戸棚と明てやらふ、忝ない嬉しい、夫が嫌さに此苦勞云ひたれば言や大事な、二郎兵衛殿と此ささと念比と仕て居る、戸棚の中なは二郎兵衛私も科は脱れぬ、靡ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と、所存極し涙の体由兵衛聲とたて、若い衆は出見世に、盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口、何所に居ると呼はる聲眞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて駆付る由兵衛威丈高になり、是御覽あれ、旦那衆の腰と離れぬ此鍵と盗み出し、彼の如く單荷と明け戸棚と明し所へ、身が來ると見て戸棚の中へ逃こんだ、所としゃんと錠かろした中に居るは二郎兵衛、手傳は此おささ証據人は此由兵衛と、出來し顔の腕捲り、ささは涙に性根もなく、内外の者ははつと斗り顔と眺めて居たりけり、眞法鍵と腰につけ四郎右衛門は最ふ寝てる、旦那に聞せて兎も角も思案が有ふと有りければ、由兵衛先町代と呼びにやり、宿老殿へ報せて町中挑灯繩よ棒よとひしめければ、奥より由兵衛くと、手と扣いて呼はる、あいと答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き次第とつくと聞届けた、子飼と思ひ肌と免し扱もく憎い奴、突の間に鍵取る、恐ろしい仕方、去ながら己が聞ては六のしい、夜中にわやく町内の外聞も能らず、外へ物さへ散すは己が聞ぬ分にして、濟し様も有

ふこと、何云ふても夜が更る二郎兵衛めは籠の鳥、其分で戸棚に置き、ささめは今夜請人の姉めに急と預けにやりや、急ては粗相も有る物とつくと分別して見よふ、女房子供が恐がらふ直に出見世に泊らしや、手代ども、向ひへ、母者は爰へ来てお寝みなされと申して、其方も歸つて明日おじや、必ず何にも穩便に宵の中に皆寝さしやと蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出で、夜中に旦那のお耳に入り眼病に障れば如何、何事も明日の事これ長兵衛權兵衛、太儀ながら此ささと請人の姉めとに、急度預けて直に出見世へ往て寝や、ささ立と云ひければ、申しかみ様参ります私身は推はねども、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有る事、おる様へもお取成萬事頼み上ます、盗人の名と取り是が悲しう御座んすと、わつと泣出し送られ行く目もあてられず不憫なり、眞法様奥へござつてお寝み、我等も明日早々久三も表と能ふしめて、夜里に寝やとて出ければ欠伸と直にあくと云ふ返事、眠たき夜なる聲廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ、内は静まる燈火も心も細く更にけり、物の憐深さこそ後生願ひの心なれ、人も寝入て眞法は寢醒の床と起出て、戸棚の傍に差足し、こりや二郎兵衛いさすりめ、聲聞知たの阿呆めと、ことくと敲るるれ

は地獄で地蔵に逢ふ心地、そのみ様の恥しや、庖丁でも薄刃でも柄と脱て戸の間うら、
 密と入れて下されませ、お馴染だけのお慈悲ぞと泣聲漏る斗りなり、死る程の性根で卑
 しい事と爲る物のと、袖と覆ふて錠鍵の音せぬ様に戸と明けて、其所へ出かれ町人と云ひ
 年寄の婆なれど、菜刀でなり共己が首は切て遣ふと、故意と詞とあら、のに叱られてしよ
 ぼくと、這出る帷子も汗にひたりて、時の間に顔も瘦たる酷らしさ、流石子飼の主心叱
 る心はわさへなり、思はず涙と流さる、二郎兵衛顔振上げ、眞法様面目も御座りませぬ
 お主の罰と計りにてはたと俯伏し泣きけるが、御存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし
 、氣も違はねども耻しや、ささと念比較せしと由兵衛めがねたにこみ、何かな見出そふ
 くと文盲知れぬ手形と書き、ささ親子に判とさせ旦那のお手に入し事、いかにしても覺
 束なく此手形取ん爲はあり、戸棚の内ぞ微お聞けば旦那のお耳へ入らぬとやら、何事お耳
 へ入れずに済む様に頼み上でする、彼の眞直な旦那殿お心の蔑視が、首切る、より悲しい
 と隠居の膝と載さく、墨に喰つた泣き居たり、やれ其言譯は己が心の了簡よ、主の腰の
 巾着わけ屋内の錠と盗み取り、此たいそれた言譯がでんとでもや立べきの、由兵衛が我

儼な手形とは見たれども、其場は其日の亭主方無興と思ひ其手形は、とふに破つて捨てたぞ
 やささめと、己と夫婦にして未では世帯に嫉んと、此年寄が苦に持たも斯う破れては水の
 泡、何程慈悲がしたふても理と非には枉られず、目の明ぬ主と由兵衛なとが言立ては、朋
 輩共も氣がふれて跡で人も遣はれず、己に不憫もかけられず、思ひ切てささと由兵衛にや
 れ、時には四方圓くなり其方も茲に勤よく、主の恩も送らる、己が心持次第、池田の姪の
 中にては女房には事のぬ、ささと遣るの何様するぞと、我子に意見とする如く叱つ泣つ
 割口説、二郎兵衛も唯泣入て、暫時返事もなかりしが、一々のお詞聞入れぬは、畜生に劣
 る二郎兵衛なれども、あつと申して御恩はよも送るまい、元服も致したものと丁稚よりな
 と押下て、差でもない事言立お踏ぬ斗りに擲たさ、虫でも堪忍なりがたき無念と涙さ参
 りしも、お家のお影で一日もささと一所に住居とせば、由兵衛が面と踏返した同然と、思
 へば今日の奉公も心せめしう勇しに、やみくるとささと渡し是や見たると云ふ面が見て
 居られふの口惜や、どふも私は堪るまいと無念涙は目にあまり、袖と喰切り我身と搦み身
 と裸はして歎きしは、心底道理にむざんなり、いや申す程お主の慮外、兎に角元の戸棚

に入り彼奴が致した通り、錠とあるして下されませ直に籠へ参らば、是今生のお暇を御恩を報せぬ段は御免有つて下されませと、遣入る所と引出しやれ思知らずの物知らずと、腹立涙の隙よりも十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたり、三日にあげず煩ひて迎も用には立まじき、去せくと人毎に言ぬ者もなりのしと此婆一人じやうとはり在所へ戻さば死るは定、眞の慈悲とは此事と十八の春まで、呪咀と薬とと孫子にもせぬ世話として、四郎右衛門も物入させ、やうくと人になし、朋輩共も嫉む程人に勝れ目とつけしに、籠ひつに入る時菱屋の婆が阿呆盡し、盗人のひたて親方は眼病なり、身代わけるも知ぬと四郎右衛門まで誹せても、己が一分立てたいな、御堂のあさじ参りにも、女子共起して苦勞うけては後生にならぬと、己斗り伴しに明日より朝じに参られず、願ふ後生も願はせぬ淺ましい氣が附初た、此家に馴染ば犬でも猫でも眞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たけ、此上にも我と立て己が情とじやうあたて、死たくば戸棚へ入れと泣つ威しつとまづくに慈悲心余る涙の意見後世に入たるしるしなり、二郎兵衛聞き入れてや伊尤もく、今合點参つた、思切て由兵衛にささど遣りませふ、夫が定るら誓文立て、來月は母の

七年忌、此頃取越致した此母と、奈落に墮しませふと跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし、出来いたく此家久しい重手代、由兵衛と張合て勝て負と云ふ物、何事も眞法が美しう濟して遣ふ、二階へ上つて最ふ寝めと戸棚の錠前しと、おるし阿呆めがおさる斗りが女房の、彼の様な洒落者より、おひくひくくの手いらすと抱せふぞ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて、奥に入る心殊勝に哀れなり、二郎兵衛夢とも誠とも氣もうつとりと成りけるが、左もあれ彼の手形隠居の破つて捨しとや、今破つたは何じや知らぬと取出し、合せて見れば南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、此晦日に元利残らず相濟む等、フツフはつと明たる口も何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よろめく足元判の破れと引寄せて、合せて見繼で見繼に繼に繼れぬ命の難儀、さふも生ては居られぬ死るとも生るとも、ささは離さじ離れじ物、先此家と脱殻のひよろつく足と踏留めく、表へ出る中の間の合の戸密と明ければ、竹が蚊帳に丸裸身蚊と繞く紙燭めいぐたり、ま、邪魔な爰と通らば咎むべし、如何せん何と扇子の一煽ぎ、はつと消れば、悲し、憎の風めや火と消した、今夜一夜は蚕と蚊に此肌と手向るじや、あつたら物と久三でも

おじやうらで、二郎兵衛殿とおきよの殿挨拶見れば美山しうて耐らぬ、此方も登には在所へ
 いて、あは畑でしげると、ころりと寝たる音斗り郎の聞はあやなしや、漸々と門口の貫の
 木堅き家の風、鍵は久三が預りにて、朝比奈ならね門破り詮方つきて立居たり、預けら
 れたるきよが身の出ては姉の迷惑と、知れど夫の懐しさと、分て別なき割菊の紋の風呂敷
 引包み、菱屋の門口櫃の穴覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく胸騒死して泣聲の、内
 へ微に聞ゆれば二郎兵衛も櫃の穴、顔と寄れば鬢の香の梅花の薫はあきさう、あいの二郎
 様の、語りたい事斗り愛がとよも明られぬ、此戸一重が關守と互ひに身とすり氣と踏さ、
 泣くより外の事どなき、浪花橋の辻に寝し犬一疋吠ゆる、聲につれて方々より七八疋、
 きよと威して吠立る、恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に猶取付て立たりしが
 、中の間の竹目と醒しぬれ久三門にいうふ犬が啼く、何も無いの起て見や、おふと答ゆる
 寝聲の返事、夫やこそ久三ときよは東へ、二郎兵衛は中戸の影にぞ隠れける、久三は例の
 蘭絆一ツ桿棒提げ貫の木明け、耳門開いてつとと出で、なんにもないもの非人がな通つ
 たり、来い〜〜と呼び犬共尾と振りふる、蒸暑いが外へ出れば極樂の西風、きよと添
 ないと涼む間に二郎兵衛、積重ねたる染地のひの絹、壹反解いてくる〜〜身も頭も眞
 白に引包み耳門とぬつと飛出れば、なん悲しや幽霊じや、幽霊よ〜〜と逃こみ門口はたと
 鎖す、危なや地獄極樂界と筋あら是れ愛と、招かれ寄りて何事も先此近所と退いての事、
 あては無ければ前の方人や咎めんくる〜〜と、絹も包む世と包む、其風呂敷の木綿巾身
 のなり果てこそ

二郎兵衛おきよ道行

下之卷

一ツとやひとつ涙の瀧の糸落ちて三津の川となる、二ツとや筆もあれし我心書て後世に
 留めたや、三ツとや見たや聞きたや故郷の親の生顔夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢醒て
 はいつこの此娑婆へ、歸りこんどの敷入は女夫連でと約束の、盆正月の十六日と待ち樂みし
 我々が、哀地獄の釜の蓋開と待べき罪人と、呵責の責はよもやその、愛しいこなた可愛そ
 なた、脱すまいぞや脱さじと縋り抱よせ泣姿、咎めて吠犬の責此世に地獄見せけらし、是
 も思へば親の罰私は親よりお主の報ひ、育てられたるお情けや後生願ひの親方の宵にや和

露夜中にや念佛、早真夜中の月しるの空と力に東堀、澄行水に影映る我身の濁り耻し、耻
 は暫しの浮世なりとも戀とする身の手本町とは、二人が心ひとつに米屋町とも思ひ計りて
 彼生七生助のる、かれが殿御は日本おるのよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房
 、花の様なる和子設けて、久太郎町とてやがて寺入久寶寺町、其豫言もいつしうに空寝の
 夢の馬喰町、誠に私もこなさんも後には親のわれ残る、老木の老の世はさうさまに願慶町
 も空ごとや、安東寺町も子故の間に迷はせません不孝の罪何と脱れん浅ましと。又引よせ
 て置く涙袖にさし来る鹽町や、長らぬ世に長塚の樂な世界と心おら九之助橋や是やこの
 、瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松はいつの時雨の一車洗へど
 落ちぬ戀衣、世にひろがりし浮名とよそに諸ひしことの葉や、其油屋の一節も臘月油が身
 の上に懸る涙とこぼれそひ、明日より同三味線に法の灯し油屋の回向となすこそ哀なれ、
 ひとつ有さへ惜き世に今宵限とほりづめや、命二ツと二ツ井戸深い縁とて死にたいも皆罪
 障の大和橋、あの千日に立つ煙無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと死に場尋ねて露にしみつ
 く稚子、肩と務とはおぼる花色腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に彌助の松原是と最期に京橋や

ら西に川口舟の帆柱、此處に惠比壽の松原松のくるみ雨雲の、降らぬさきとて道急と早
 曉の旅人や、死に行くものよは知らいで人の浮世渾口曲もなや、知らいで人のよは知ら
 ずや人の浮世念佛も頼もしく、傾く月と知る邊にて空と拜めばおちるたに、といろくいと
 遠くなるとの海のと聞けば、あれくよそに轟く雷鳴の落ちる、共、我妻と避て涙の袖
 おほふいや我は男よそなたと、互に覆おほはれて今死ぬる身も生身には、目に恐ろしさ
 稻光野なの水に飛ぶ笠、御堂の影はまがはじと歩みよるく足た、ぬ惠比壽の森にぞ着
 につける、二人は松の下蔭にぞうと座と組み泣けるが、男は氣弱若者、譯もないことした
 はいの内に居る時はしりのさきの菜刀でなりとも一人死ねば能いものと、死ぬるに連と遊
 らへて旦那には事欠せ、家の名と出すと云ひ、女房の親兄弟に難儀とあける大肝やつと、
 死類とまぶられ日頃立てた正直も無になり、よしない者に縁ふれたとそなたも世間の評議
 にあふ、許したるもやと斗りて涙 正体な有りけり、なふ死際迄其様に私が事思ふての
 嬉しう御座る 忝いと供に打伏泣きけるが、左れども夫は愚痴じやぞや拵好こそは大きれ
 なれ、昨日今日の前髪と姉と云ふても大じないきさめが酷や殺したと憎みは我身一ツにて

其處は露ちりいとね共世間晴て宿小屋持、若い衆のつき合ひに老女房持つたとて、人が笑うが調ふるふ此兩の手の有りたけは、命限りに縁き出しまあ十五年辛抱すれば、こな様は三十六私ばちやうと四十一老女房のゐとくに、男に家を買せたと譏りし人にうらやませ男にひれと付ふぞと、思ふたこと云ふたこと違へば違ふ現世さへ未來は猶のし覺束なや、中有の旅の雲さりに見失なふと有る共犬死と思ふて下さるな、六道の辻にて必巡り逢ふぞや、とんでもないこと盛畜生界に落ち、虫けらに生るゝとも同虫と生れふと思ひ詰たうつめました、左は去りながら何に成らふも知らぬ身の人界の見とさめ、ま一度顔がよふ見たい私も見たいと引よせ、我故に殺すの女房故に死なしやんすの、愛しぞや愛しいと盡させぬ悲さひぬ思ひ、思ひ亂る夏草のしはれ伏てぞ泣き居たる、あれ〜夜明も近付のちら〜人の通ひも有る二人が帯と結び纏ぎ、云ふた通りと解んとすればいや帯と解ては見るるしうらん、此絹は親方の商ひ物盗みはせぬ共、斷り云はねば盗みも同然、是と此木にもはへ付け旦那の絹にて首くれば、旦那の手にのゝるも同然、一ツの罪や脱るゝと音の例承、是も男と女郎花そればくねる是は又、うねりし松に手と採て渡るも

夢の浮橋や、無明の橋の最細き心の罪に踏滑る足と踏しめ、踏しめしても上り煩らふ男の体、女子の身でさへ上る物はやとふぞいのと手と引ば、二郎兵衛涙とばら〜と流し、主の罰の恐ろしや此足袋の片足は旦那の古、常は兎もかれ此時は頭にも戴くはづ、土足にのけし其詰責お許しなされ下されと、脱捨て登る松が枝にそりや雷光鳴ふぞや、吃驚して落まいぞと夕立頻る雷神、目指も知らぬ松影に何やら暗ふて見へてころ、愆深い事ながら貌とよせて下さんせ、雷光の影になりとも顔が見たい見せたいと、くはつと光ればわつと泣き、叫ぶ聲々雷神も思ふ中とばよも裂ぬ、涙の雨に二重三重締つけ、二丈の絹も我々が一ッ達は一丈ぞ、往生浄土は一寸ものも縮めも、よいの、首の結り生々世々解ぬ契りの堅結び、もふ物は云はれぬ云ひたい事は御座らぬの、和女は無いの私は父様母様が懐しい是斗り、我はのみ様旦那の事、云て盡せぬ此外は唯南無阿彌阿彌佛はつらぞ、唯今が南無阿彌阿彌佛〜南無阿彌阿彌佛と踏はづし、落る袂と引き寄せて抱き附ても苦みの、寄りては離れ離れては足と締め手と伸し、虚空と掴む臨終の互ひの目には見へながら、物は云れず岩代の松にのゝれる下り藤、鼠になやむ如くにて次第〜に廻り果て、消行く星

と賭共に一度に思起へ目と塞ぐ、桁丈崩ひし死姿、及び伏すは古手にて、これ心中の新物と聞く人回向となしてける、

今宮心中

337106

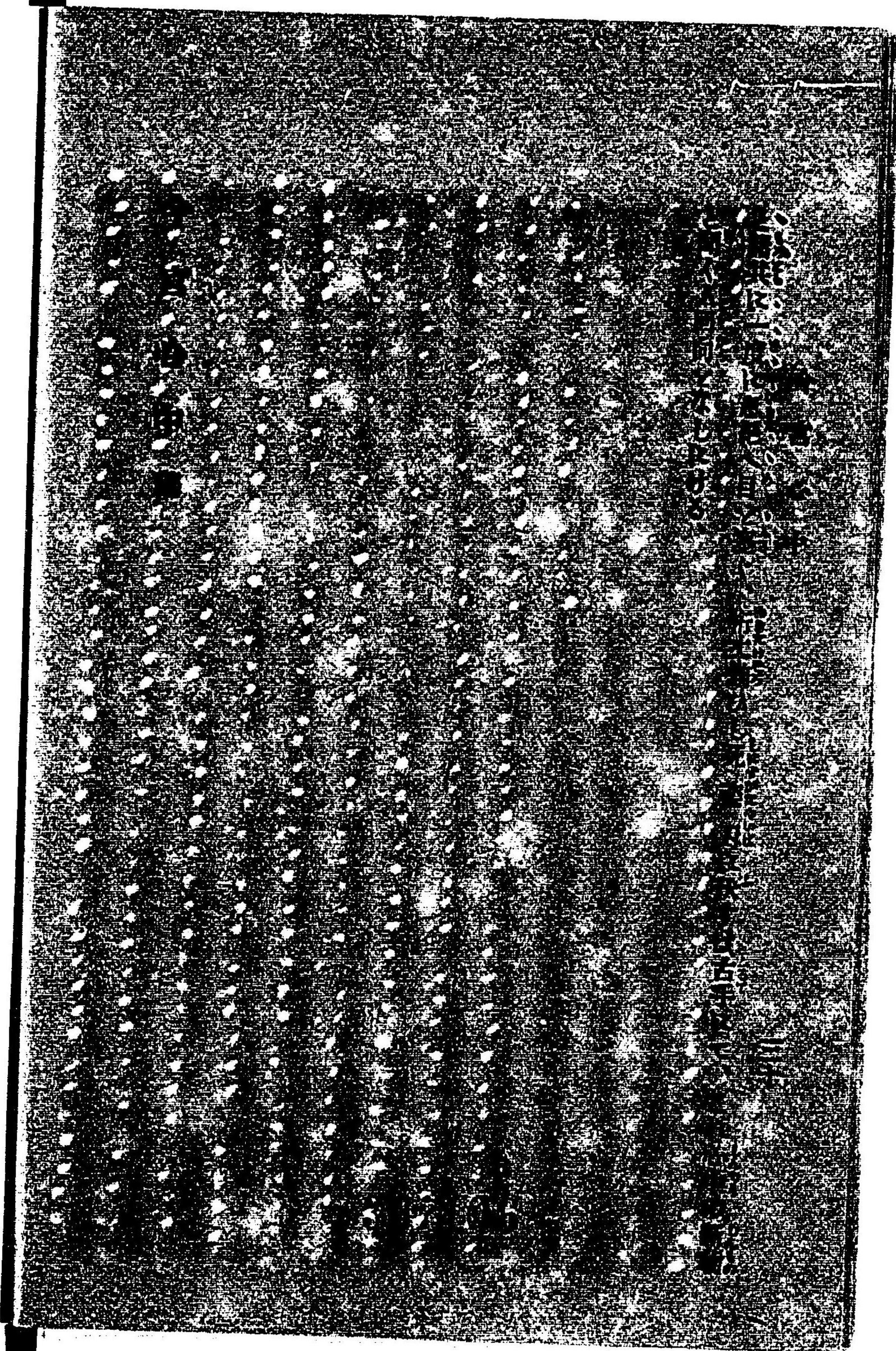
ひあまを 卯月の潤色

近松門左衛門作

上巻 末期の道行

今捨る身にも恐ろし犬の聲。辻と隔て、見飯れば。あれで生れし町所。家の馴染も十五年、其春夏の此月は、祝ひ月とて物思ひ。しの字とさへも嫌ひしが。死して死骸と知る人に其死耻も包ましく。其方の騒亂れすや。いや我よりもおの様の。髪撫附て掻なで。死んだ跡迄よい殿と。人に言はせまほし明り。今宵の月と月々に。待しも遂に引かへて。冥土の使ひ我々を。待らんものと掻くれて。泪曇りの十七夜二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮るとも。假令佛になるとても。必らず契り米屋町。本町筋の軒先く。思ひ染みたる中なれば。埋まけ同じ安土町。生れ變りて又いつら。娑婆の便りの備後町。思へば我も元服し。私も若いに鐵髻つけて。のがれ、塞の河原町。三途の瀬戸の淡路町。超れば親の古里の名にも別る、平野町。曙近き時太鼓ぞうく修町。これやこの修羅の太鼓の響きのと。共に驚く袖と袖。抱き寄せつゝ泣くばあり。聞けば私しも母様の三十過ての初子とや。其

卯月の潤色



ひあまを 卯月の潤色 近松門左衛門作
 宝永四年六月初興行 作者五十五歳
 上巻 末期の道行

今捨る身にも恐ろし犬の聲。辻と隔て、見ぬれば。あれで生れし町所。家の馴染も十五年。其春夏の此月は。祝ひ月とて物忌ひ。しの字とさへも嫌ひしが。死して死骸と知る人に其死耻も包ましく。其方の鬢亂れずや。いや我よりも、おの様の。鬢撫附て搔なで。死んだ跡迄よい殿と。人に言はせまほし明り。今宵の月と月々に。待しも遂に引かへて。冥土の使ひ我々ど。待らんもの搔くれて。泪曇りの十七夜二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮るとも。假令佛になるとも。必らず契り米屋町。本町筋の軒深く。思ひ染みたる中なれば。埋まば同じ安土町。生れ變りて又いつら。娑婆の便りの備後町。思へば我も元服し。私も若いに鐵鑿つけて。のがれし塞の河原町。三途の瀬戸の淡路町。超れば親の古里の名にも別る。平野町。曙近き時太鼓ぞうく修町。これやこの修羅の太鼓の響きのと。共に驚く袖と袖。抱き寄せつ、泣くばあり。聞けば私しも母様の三十過ての初子とや。其

卯月の潤色

譲りのや馴初て一夜離れた事もなく。交す枕に子胤のない。是も産まざるの數ならば。根
と堀る竹の伏見町。高麗橋の西東。床も定めぬ立君はこれも世渡る習ひとて。浮世小路の
細き聲。唄ふてゝへる其歌の。品ある中にも來ぬ人。まつはの浦の夕和に。やくや藻汐
の身と焦す。夫は吾妻の物語。耳に聞きたる斗りぞや。和女と我は浪速津の。貴賤群集の
見るめゝる尼ヶ崎町くはしよ町に。はや北濱や中の嶋。明日は天満の橋を賣りて。梅田の
梅田の堤とそめし。紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿一お龜は十五。年にあはすりや。悪戯
くじや。繪双紙る。余所の口の端。余所とに買求めては慰みし。此身の果と讀賣に
誰が節つけて田舎まで。唄ひ流さん蜆川。水も濁りて此世へは。いつ歸りとも根なし草。
ゆんでは無常の燒草と。惜のらぬ身はおしゝらす。灰となさふの此肌。煙りとなるの此形
ち。惜しやいとしや悲しやと。引合し手と猶締めて涙の限り泣つくす。杜の小鳥川千鳥合
法鳥も聲さびて。早東雲も近付ば小田守る賤に忍ばんと。右へ下れば網舟の目にやのゝら
ん行く先は。早曾根崎の神主の朝淨めする折なれば。今は詮方夏草の。人目堤の下蔭と爰
ぞ夫婦が最期場と。泣く泣く息らひ立にけり。お龜は夫の顔と見て。連立つ冥途の道とは

知れど。今今生の別れとて言たい事の何やらが。胸にはあつて口へ出ず。倦程顔が見て死
にたや。心なの短の夜と身と投かけて泣のたり。愚のや愚痴や淺ましや。永き來世があ
るぞのし。去乍ら心に懸るは其方の父御。二人とも無き獨り子と。憎や聲めが殺せしと。
さこそ恨み憎しみの。是罪障となるぞとて。共にひれ伏し泣きければ。いや父様は男氣の
思ひ締め有るべきが。愛しや在所のお袋様姑母なりとて一日の。給仕へした事もなく。大
事の子とば要故に。失なふた殺したとお叱りなされんこれ一ツ。目の不自由な伯母様の。
力と成るはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ眼でも眩ぬの。どうしたと胸に塞がる是二ツ。
又母様の十三年觀音經と書ませふ。佛になつて下さんせと墓に向ふて約束の。是が違ふた
何やのや斯迄重き罪科の。閻魔の前には黒鐵の帳に付くと聞くものと。能い所へよも往の
じ火水の地獄も厭ばねども。夫婦別れて行ふのと。是のみ猶も迷ひぞと聲もおしませず歎き
ける。遺が男は力とつけ。一途に行ふと別れふと皆一心の向け様ぞ。氷の地獄火炎の地獄
劔の山へ登る共。取交したる手は放さじと。心強くは言ひけれどまだ蒼い花出る月。玉の
様なる若い者若い女の顔はなさ。和めらるゝも和むるも分て分たぬ涙なり。あれ早東も白

ふだり。念佛と云ければ。心得たりと懐ろより髪剃二挺取出し。これも母様の額たれとて譲りなり。私はこれで死たいと泣くく出す其中に。向ふの野道と人通ふあれよくと必は急ぐ。二挺の髪剃一ツにとり。南無阿彌陀佛と引寄せれば。お龜は常々信仰の南無觀世音菩薩様。母様の戒名教譽授給信女。一ツ蓮に導き玉へ。南無觀音様觀音様と手と合せて待けれ共。男は目眩れ差うつふき。只泣くより外の事ななき。愛目と見せて何事と。夫の手と取り我が咽喉に押當れば思ひさき。南無阿彌陀佛と笛のくさり。髪剃の刃も折れよと一振は振りしが。若き者の悲しさは。とゞめの急所と知らずして。未だ息絶へず悶ゆると疵の口と際さんと抱への帯とくるくも。二三遍引廻と愛目の程を不憫なる。我も臆て追付んと咽喉にあつる髪剃の。刃は鋸と折砕け皮肉はより切れけると。力を入れて突きければ刃も貫りつべうはななりけり。南無三寶と髪剃すて傍に抜置く脇指の。鞘と持て引上ぐる鏢は重し手は弱る。はづんで刃る勢ひに脇差ぬけて樋の口の。井出の水草の漲つてさんぶとこそは沈んだれ。よしなしたりこは如何にと這ひ下る堤の露。翻れし血に足灣り池へさうと落たりけり。池は深く泥土深し底の脇差採ぬね。浮ぬ沈みぬ漂ひしが今と最

後の眼にも。夫と思ふお龜が心引揚んといや思ひけん。はふく岸によると見へしが眩む眼に氣も亂れ。同じく池へさうと落互ひに助け引揚んと。抱き上ればさうと臥し。搔上ればあつばと伏し心斗りと力にて。喃與兵衛様く。お龜くと呼交す。絶へく切る息の下この世のらなる地獄のや。哀れ果敢なき有様なり。朝出の土民が見つけ出し。ヤレ心中と呼ばはる聲に。里人おひ合ひ池に飛び入り引上れば。女は死して眞薦草筵や席に死骸と埋む。男は淺疵ながら死ぬ殺してくれ死なしてくれと。泣き叫ぶ間に縁者一門駈付く。北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取。聲養子と取々に見物人の山となど。斯てはすますと與兵衛と駕籠に打乗せ。ながらへし甲斐も有るのや峴川。跡白波とを成りにける。

中之卷

廣がりし浮名は何とすばめても。傘屋夫婦の心中と。歌に謠はれ繪に賣られ。或は狂言淨瑠璃の三十五日に早なりぬ。父長兵衛は一人子と敢てなせし其悔み。聲與兵衛が疵も又龜堀の伯母諸供に。傳三兄弟引連て河内の親の手に預け。天王寺のとうもんと大坂の方へ歸りしが。下女のふりは神子町と見遣りてわつと泣き出し。申し伯母御様お今女郎。今迄

は物見見物物参り。又は此よな時節でもお龜様も打揃ひ。びらり帽子に加賀菅笠大振袖の後帯。如何な者でも見返りてお供に付いた私等迄。ほんに肩がいのつたに大事の花と失ふて。物足すなほ供には歩けと足と引戻す。何時やら爰の神子町へ夫がお供の仕納の。冥途の道の一人旅誰がお供しませふぞ。お振如何じや斯じやと愛増らしい聲付が。耳に残つて有る様な元結一筋紙一枚。買はずに貰ふて遣ふたものお龜様に別れてあら。五分で買ふた塵紙と涙に拭ひ上げた。口説立てと歎きける。伯母も涙の乾ぬに又云ひ出して泣しやるの。實に何時ぞや口寄せに此神子町へ來たと聞くそれも斯なる約束のや。最期の時は親伯母に云ひ残したい事もさぞ。問て取らせんいざ去らばと。冥途の闇の黒格子辻が元へぞ立寄りける。神子の内には心得て茶と持て出る煙草盆。文庫の蓋に梓弓おくより神子も立出て。御祈禱の口寄せのお心ざしの精霊は。目上の目下の古い佛の新佛の。神降し致してはお十二銅が一包。御さき除が百二十お望み次第と云ひければ。くく禮錢は何程なりとも。三十五日の新精靈荒血の上で死したる人。能ふ寄らつしやれ寄り給へと。各珠數に手と掛けて聴聞せるこそ哀れなれ。千早振る御さき除の道浄め。天清浄とは水火の浄め地清

浄とは家内の浄め。内外六根清浄とは世に亡き魂の道知邊。六道四生の浄めぞのし。悉なくは座せと神と佛は夜と晝。娑婆と冥土は日光月光出るも入るも同じ道。娑婆往來八千度釋迦の子神子が梓弓。此梵音に寄り來たは梅田に屍さらしなや。伯母様の手向有難や懐しの父御前。合の枕の與兵衛様忘れがたなき古へは。生口寄せた我なれと今死口に寄り人が。語りたいてや問れたやなふ。梅田に屍さらしなどは我名月の面影よなふ。姪一人伯母一人何とて我に知らせもせず。不慮の死とめさつたる。目の見ぬ我なればおぼ捨山か恨めしや。山の枯木の一本立母なき身には伯母様と。天とも地とも頼めどもふちの木柱茅屋の雨。人こそ知らね屋の内に直で立たる人はなし。先へござつた母様の第三年も立ぬ間に。出船は遠く入舟の親なるは世の慣。烏帽子寄の親父様家の今めに廻されて。此方等女夫は雨夜の星。何所に有るやら無いやらで。死なねばならぬ内の談語れば親の懺悔なり。下された緋縮緬形見になれとの端縫の。我名は苦の下紐も與兵衛様はお最惜や。六尺だけに存生て二度の死となされふの。二度憂死なされふの是れが迷ひとなるはいなふ。伯母が歎きもそれ一ツ心中の作法にて。死損なひし片々は試し物になると聞く。與兵衛が疵

養生し本復したる其後に。試し物になるならば伯母は何とならふぞや。和女も伯母が可愛くば片時も早ふ一道に。取殺してはなせたらぬぞ。いやなふ世間の心中と夫れは違ひがあら金の。金銀づくの勤めの身奉公人や主ある人。娘子などの添れぬ中狼狽へ死ぬ心中は。人殺し同前の罪に沈むも世の作法。幼稚馴染の此方女夫比翼連理の中はよし。何不足は無けれども家では誰か點と打つ。大鎌の犬めらに懲果て死ぬる身と云は。面々じかいとも心中の外的心中ぞや。町衆在所世間へも此歎きと云ひ分けて。與兵衛様の命と助け道心出家させまして。朝晩回向が受けたやなわ。そこに躊躇ふ兄弟の犬どもと追出して下さらば。千僧萬僧百萬僧のとい用ひにもまを鏡。冥土の曇りが晴したやなふ。いや是れなふお龜様。女夫の衆が此今とぞでさいて飲む様に。言たいがいに云ひ籠めて死でもまだ云ひ足ぬ。榮耀が余つて此方衆がはたへ死ぬるゝと已兄弟が知た。それに何じや兄弟の犬めらとは。チ、私や犬じや黒犬じや。試し者になる與兵衛の身体とがりくくど喘でや。梅田堤で和女の死骸噛いで残り多いわいなふ。なん死人に妄語はなきぞとよ。恩と知らぬは犬畜生身の皮剝でも母様の。御恩と思は。幡天蓋袈裟の一重り上げはせず。着衣裝

までももがり取り。家一杯に荒鼠父御と誑す見苦しや。それに弟の傳三めが旦那増りにとぼし立て。提燈に釣鐘と主ある我が袖裾引き。與兵衛殿と失ひて夫婦になつて家の跡。糞ふと云ふたよ忘れた。此方等夫婦は下人にて今兄弟は旦那顔。車は海へ舟は山皆逆まの憂さ愁さ。語れば親の罪晒し云へば詞のくすいと。夜の衣の我夫の命と助け出家となし。家と晦ます黒雲と除けば晴る胸の月。守りの神とゆうつけ鳥の別れは又の逢瀬あり。今は返らぬ三途の川影は留らす手に取られず。冥土の使繁ければ浮世の名残是迄と。梓の弓の筋に放走りして失せにけり。伯母は涙に沈みながら神子の前とも思はれず。是れ長兵衛の邪見者亡者の寄口聞きやつたる。我は其方の姉じやぞや。身こそ貧なれ一文一錢合力は受まいし。何輕薄が言ひたるる現在弟に殿様付け。内外の者に追従するも母のない姪子共可愛からせふ爲はつあり。月に一度しいて二度三度とは往ねども。家のさだつも見て取た此摺の類兄弟が。お龜女大と踏付にせめて廻すと云ふ事と。盲目でさへ知て居る其方に二ツ眼は無いの。但知つての指圖のお龜は其方が死した。お龜と返しや姪返しや。如何に妾が可愛ひとて我子に思ひ返るとは。酷いぞや愛いぞやと堰上げく泣き叫び。傍なる竹杖

追取りて姪の敵と長兵衛と。散々にこそ打たりけれ。傳三も今も縫り付き。是れ申し伯母御様。人中と云ひ女中の身如何に弟御なればとて。近頃非道千萬と振放そ手と振解さ。ヤ、非道とは誰が事其非道と云ふは已等兄弟。同じ女子と生れても。已等とは違ふたぞ善悪は噛分ける。エ、叔此伯母か手前鬼も角もするならば。お龜夫婦と引取て分立て商ひさせ。公事みやしても已等にかやく口と利せふ。貧の病に肩身もすぼり。可愛やさよはな甥姪と踏付にさせたよな。切て片眼見ゆるなら起居素振に氣と付けても。斯聞々とは死せまじ。其惘然な心のらは。二人が死に出る体と見ても見ぬ顔仕兼まい。恨めしの者共やと。盲目打に擲り打ちく聲も惜ます泣きけるが。不憫やお龜が存生に。已等が奢る面殿さたゝらふ擲たゝる。若い身なれば齒切して堪へた心思ひやる。是はお龜が打つ杖と折る、斗りに四ツ五ツ。又ちやうく擲つけて今は打つても擲いても死んだお龜が歸るにこそ。由なき罪と作りしと杖とゝらりと投げ捨て。前後不覺に伏し沈み。聲と斗りに歎きしは。道理責て憐れなり。至極に語り一言も傳三兄弟顔と下げ。ふしめになれば長兵衛も漸泪と押しめ。道理とも尤も共皆某が誤りなり。此上は身に替て與兵衛が命と助け。出家させ娘

が願と立て申す。落居の後は今兄弟家と退出し申すべし。外聞と云ひ親の身でのめく生て居る心。伯母御推量遊ばせと又さめざめと泣きければ。夫はせめても其詞違はぬ様に頼むぞや。神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生口寄せに参つたげな。美しい娘こそ今大坂の口の端に。ゐる梓も縁ならめ。拜んで下され頼みまこと。出れば神子も門送り。爰しほ様やと諸共に思ひの数も百廿。袖に涙と包み錢聚がる因果や。巡り行く月にも日に。秋風と捨て果たりし與兵衛が。生甲斐も無き身なれども。親伯母の心黙止されず髪削こぼし發の透げ妻の菩提も我後世も。助け給へと云ふ文字其名と助給法師と改め。二度難波の故郷へは踏返さしと足曳の。大和の國平郡谷大念佛派の庵室に。知邊と求め閉籠り妻の位牌の手向草。もうくたる谷に下りては去此不遠の水と荷ひ。盤々たる山路に薪と拾ひては。十萬億土の月とよ霜に儘に伏し。櫻が閉す柴の戸も。躑躅にわけて今年も早。卯月中旬になりけり。相住の道心は二三日以前より。石山参りの留主なれば。助給一人佛前に心も細き鐘の聲。ろさんの雨の世捨て人。捨ても捨てぬ面影は夢ともなく現とも。無き人爰に有りくと昔と見るも歸るさ知らぬ死出の旅。露の仇報籠急が。こ

ひと言ふ其たう網にのらまれて。浮みもやらぬお龜とは。外には人も水くらき澤邊の螢稻のどの。影のあらぬる籠のひまに。漏は卯の花白妙の雪のな。振袖ちらくとな。ありし昔に奈良團扇。風あろくど駕籠昇が。昨日の旦那今朝の幻。夢の浮橋一ツ橋跨げじや合點じや。跨げじや合點じや。手にも取られぬ腕籠籠。姿の山に肩替る腰が袂も幽なる。折節助給は念佛に氣と屈し。忙然と眠けざし物に化されたる如く。うつかりとして表と見れば。山家に見馴れぬ女中駕籠不思議と思ふ氣も付ず。身とも所も打忘れとぼんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原息杖の音のまびすく。川瀬が鳴るる空耳か女の聲にて高々と。北久太郎町古道具屋傘屋與兵衛様と申すお方は。此邊では御座らぬかど。尋ぬる聲と諸共に駕籠は庵に近付たり。助給は元より魂魄に氣と奔はれたる夢心地。是々其與兵衛は愛じやくと扇と上げて打招く。ヤレく嬉しや。彼處じやげな。駕籠の衆頼みます最些急いで下さんせと。機嫌よげなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室の柴の戸口に昇据る。籠と上ぐれば妻のお龜莞爾なる縁の眉。芙蓉の目元わさくと扱ても熱い事な。それそな搦の葉の水一ツ。下さんせと汗拭ふと見へにける。いやく水はいらぬもの釜の下と焚付けふ。

して先今日は駕に乗て何處へ往やつた事ぞと云へば。さればいな今日は四月十七日観音様の御縁日。此方様と父様と中の能ふなる願立に。二十二社廻り仕まして其次手に神子町の黒格子お辻の方へ在所の衆が呼しやんして。一寸逢に寄りました。去年此方様の生口と寄せてのら近付になり初て。再々私と呼出して父様にも伯母様にも。折々は逢する神子殿さへ合點なれば。何時逢ふと儘なるにませ此方様も折々は。呼出しては下さんせぬとそゝろに咽ふ恨みの涙。世に亡き人と氣も付のぬ夫の心を哀なる。先駕籠は預のらふ爰へ通りやと呼びければ。嬉しや誰もさそふなど裾と搔取る身も軽く。おりのの腰捲返と駕籠は亂れて失せにけり。助給内に案内し是れ見や今は此身持。結構な事はなけれども。浮世の世話と余所に見て藪の葉のみふとま。先盗人の恐れなく寢覺か能と云ひければ。お龜は庵の体と見て。はんに扱も氣樂な住居じや。釜一ツ鍋一ツ谷のら水と汲で来て。山のら柴と折て来て米どしくと洗ふて。俎板に白瓜菜刀取ててさくくく。てさくく。てさくくしやんと揉瓜に。なれく蒟子秋蒟子嫁と譏る姑はなし。相伴は如來様火吹竹は一本。火箸は二本國中に恐いと思ふ今めは居ず。此方様と只二人寝たけりや宵のら

長枕。寝どもなくば起通し誰が叱らふとも思はゞこそ。世界の樂とは此住家女夫一所に居る内に。切て一日片時でも斯した暮しはしもせいで。今是れが何になる何ば此住居でも。女房がなふては些と事が缺ませふ。鍋蓋と女房は無ふて叶はぬ筈なれど。鍋蓋あつても女房が無い事の缺ぬは不思議じやまで。ほんに忘れた其筈じや道具と女房は有合せ。尤もじや。道具屋の娘じやものど。どんと背けて身とすねて口舌仕掛る目元なり。色氣と離れた道心も何様やら心浮て来て。サいかふ口が上つたの。斯して居ても面白い事芥子程も持ませぬ。迂散な事が有るならば拷問なされと云ひければ。それ其口が憎いはいの此方覺へがござらぬか。剛堀の伯母様の聞けばあの與兵衛は。家の茶が飲足ぬる茶屋へもちよこ。遣ふと有る。其詞と覺へての夫のら尋ぬる折もなく。今で胸に溜つて居て穿索せふ斗。うりに今日は遙々來ました。茶屋で此方のまいる茶は新造の振がつめ茶の。但は白の白茶の風呂で焚た煎じ茶か。私が様な薄茶は交した詞も醒切て水臭ふて呑れまい。互ひにこひ茶の初昔私は忘れはさせぬと。衣の袖にひつたりと抱き付てぞ泣きにける。助給打笑ひ。こころにも立ぬ格氣じやなふ。今は左様の色茶もなく只お茶湯で暮します。去ば釜と焚付

けてお茶湯一服供へませふと。火打箱引寄せてはたゞと打ければ。お龜すつくと立上りなふ熱や堪がたや。愛着戀慕の迷ひの火炎。縁に引れて石の火の身と焦す淺間しや。是迄なりと駈出る我と捨て何處へぞ。暫しと絶れども影も形もなき人の。ありとは見へてその原や伏屋に立る我妻の。位牌に隠れ消にけり。お龜女共お龜と尋ぬれども木壘斗りに姿もなし。ま一度顔と見せよのし情なの人やどのつばと伏し。消入りと歎きしが漸々に正氣つき。狼狽へたり南無三寶。思へばお龜は死したる者。扱は魂魄止まつてま。さ。詞と交せし。不便の者の心やと又咽び入るばかりなり。エ。口惜や淺ましや去年一所に死ぬるならば。迷ふとも共に迷ひ浮むとも共に浮むべし。情なくも死に後れ中有の關に迷はせし。今出家とはなりたれ共。智識智者の身でもなし文盲不學の青道心。念佛回向なしたる連亡者の功德によるならじ。今日は卯月十七日此の命日の明けぬ間に。今宵の中。に自害して來月のむらりは。未來で一所に付添はんと胸と定めて死と急ぐ。戀しき人は先にあり此世に残る心はなく。泪も溢れぬ死用意無残と云ふも恐なり。サ。待て暫し六坂の伯父在所の親。恩深き伯母のあり狂亂したりと歎きとわけ。不孝の罪も恐ろしや。一筆づ

の書置と残さばやと。佛前の經机引寄せて油も細き燈火の消ゆる間近き我命。心あまりて事足ぬ筆のそさみを哀なる。かゝる所に相住の道心石山より立歸り。何と助給御無事なの今下向致した。やあゝいと平包みせうと下して休みける。助給はつと思ひしが。此坊主はいるはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと。まめで下向羨ましい今にいのい参りの。在所の文と書きのけたる間に温湯も沸てある。洗足して休息あれと云ひつゝ筆も早めける。道心何の氣も付らず、構はずと遊ばせ。板石山の繁昌京大坂がうちあける。さ夫に付さ戻りがけ大坂へ立寄り。此方の里へ見舞た在所にも何事なく。長兵衛殿も息才。助堀の伯母御のら念比の言傳進上物と渡さふと平包押開き。來月の十七日はお龜様のひのけり。供物になされどて是れ菓子二袋。お齋でもなされふばと。大坂の名物ひの上の切荒布。嵩高な斗りで錢安な物なれど。是齋にも非時にも重寶な一分が二ツ届けます。梅雨も近付く土用前。喉の疵が發つたら。此藥と参つて随分命延はつて。伯母様の後世菩提願ひどある言傳。是れは又白縮緬のしゆさん帯。衣の上に能らふと氣の付た伯母御様。必らず粗略になさるゝな。幸ひ文の次手なり皆々慥かに届いたと念頃に遊ばせ。愚僧も一宿仕り様々御

馳走忝ないど。一寸入れ筆頼みます言傳どもは明日。長道中の草臥我等は最早休みますと。我事斗り言ひ仕舞奥に入りてぞ臥にける。此間に助給は書置細々と書き終め。伯母よりの贈物一ツに取て押し戴き。位牌の前にも供養して暫し絶入り歎きしが。扱もく有難や益にも立ぬ甥一人。ある時は氣と痛ませ心と盡させ身と碎のせ。苦勞の上に苦勞と掛け一日盡せし孝行なく。不孝第一の某と勘當不興も仕給はず。如何なる合縁奇縁にや親も及ばぬ御厚恩送りの遺す自害して又もや歎きと掛ん事。不孝の上の不孝の科日月の怒りと受け。堅牢地神は大地と破り奈落に沈め給ふべし。罪業深き此身軀と我と我身と搔抓り。喰付きて聲も上げてぞ泣き居たる。良更渡る野寺の後夜八聲の鶏も啼き交す。明方も近付きたり後れじものと位牌に向ひ。是れお龜去年の五月に伯母御より。緋縮緬と下されて御身と我が肌廻り自害の耻と隠したり。時しもあれ今夜又白縮緬の絆帯。是れも二人が申し受け永き形見と身に附ん。我も受取る受取れと位牌のひれに結び附け。端と右手にしつゝと絡み斯持たる心こそ。最期は後れ先立つとも手に手と取て行く道は。只一筋の白縮緬伸さぬ時刻只今と。髮剃取て押當しが。思へばく名殘惜の伯母御様。身と達者に長生

し後世用へどて只今も。お薬造も下されし志と無下になす。御恨み御免あれ神も佛も御慈悲に。我等と地獄に沈めても伯母御の二世と助けてたべ。南無阿彌陀佛と髪剃と咽にがばと突立て。笛のくさりと刃切たりまだ死兼て目眩く。苦痛はせじと追取り直し。人脈筋と四ツ五ツ聲と掛けて刺通し。うんと斗りにつばと伏し反つ返しつのためと打ち。苦し中にも妹脊の印お龜が位牌に抱き付き。ひよりはり待ぬ花橋昔の人と短夜の。雲隠れして世の人の、袂しはるゝ薬盤草書置に名と残しける。

助給書置

下之卷

右道具屋與兵衛入道助給。末期に親伯母の御方へ申し残と書置の事。つらく思へば老木返つて春と迎へ。蓄める花の先に散る世の慣しかたちの長持。嫁に傳はり出来合はん櫃風呂の下の霞となる。老少不定の堺會者定離の錠。末世一代教主の如來も、免れがたしと思し召せ。それ一河の舟に棹と指し。一樹の蔭の合宿りも他生劫の縁と聞く。況や親となり子と生れ伯母と言はれ甥となり。一日養育の御恩はそめいろの山より猶高しとこそは承はる。況て他年の御而倒壁と取るに物なし。殊に去年五月の十七日不慮の御難儀のけ商命

と捨る身の損銀と他目には榮耀者呆氣者。氣違者と人の譏り世の嘲り。親伯母の御歎き存せぬ我にも候はず。然れども生て居られぬ心の中。今更申せば人と損ふ毀ち家の。立つ方もなき夫婦の者涙で暮と朝夕は。湯水も喉に錠前の懸硯の海替干ても。書き盡されぬ我身の上。二人が胸に埋れ木の身にならずして。誰人が推量には及び申すまじ。其節お龜諸共に相果て申と程ならば。二度の歎きは掛けまじと迎も助める程ならば。存生へ出家成就して御恩の伯母様情の親。百年の御壽命過ぎ目出度く往生わそばさば。御菩提と弔ひ奉るこそ願道とも孝とも申とせけれ。去年はお龜が愛と見せ。今年はお龜が歎きと掛け。お心と苦しめ申す事。罪に罪と塗長持。孝行の元直く外れ申すなり。去ながら子弟主従父子夫婦。五倫の親み何れおろのは無き中に妻となり夫となり。僧老同穴の枕屏風鴛鴦の襖障子。疵も破れもなき契り今捨置にはなりがたし。殊にお龜と我等事従弟同士の水入らず。鼠入すの竹戸柵釘も離れぬ中と云ひ。去年最期の折からも一所と思ふ頼みにて。甘才に足ぬ女の身清く相果て候ひしに。我等思はず存命し。六道の辻に只一人今やくと。左こそ待兼申とにや。現に現れ夢に見へ幻に來たり歎く様。見る度毎に片時も存生へて有る心。思

ひ遣せ下されとよ。今は此世に亡き妻と二度娑婆に掘出しする。小道具屋の身にもわらず
 無常の風の荒道具。身蓋揃はぬ離れ物浮世の直打更になし。輪廻の塵の置き古し。無明の
 夜市に賣り賣下られんよりほど。今宵亡妻の忌日と期して去年い龜が死したる髪剃。縁と
 縁とと合せ厩に掛け。廿二歳一睡の夢と拂つて。せいげつ巳が眉間に施し今月今日髪剃の
 乃に滅し畢んぬ。悲しさのなや娑婆に親伯母冥土に妻。未來に情現世に慈悲。中に愛身と
 挾箱。何時の世にやは一對の一ッ遺に生るべき。是れも因果の車長持轟く穢土は假の宿。
 有漏路無漏路の中休み割籠辨當茶辨當。剝ぬ間の戯れなれば誰の端に残るべき。たとへ此
 度存生ても重ね簀笥の引出しの。一重足ぬ如くにてお龜なれば甲斐もなし。去年一度に
 死したりと思召切り給ひ。歎きも悔みも御留め只佛壇に指向ひ。夫婦の御回向有るに於て
 は。六尺屏風の隔てもなく真直に受け取り。先立つ妻の跡繼となり共に三途のかは葛籠。
 一荷に手と取り打渡り西方淨土に一文字。越るは下品下用櫃忽ち上品膳棚に到らんと。思
 へば最期急げ共返すくも伯母御様。御名残惜し梳家具。法界はのいの御回向偏へに頼み
 奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と涙と染く書き留む。毎日評判朝暮の供養。佛法繁昌の回向と

得るり其身の果報と承はる。

卯月の潤色終

一夕霧阿波鳴渡は稀世の珍本なるをもて曩に脱葉の儘を上梓と洽く世の藏書家に補缺を求めたりしに爰に殆んど一年を垂んとして漸く一本を得て之に依て其缺けたるを完ふし以て江湖の眷顧に負かざるを得たり。是れ獨り弊舗の幸のみならず江湖も亦此絶代の安壁に接して禧々たるもの多からむ。而して此施恩者と鶴澤清次郎氏。

一卯月の潤色して深川の藏書家西田氏の秘藏にして

て之を紹介せられしは關根只誠先生あり。爰に
容易に其秘本を上梓するを允されし二氏の好
意を謝す。

辰年七月(明治十五年)

編者識

中一版
三二版
中四版
目取明寺殿百人上臈
を合刻

て之を紹介せられしは關根只誠先生あり。爰に
容易に其秘本を上梓せざるを允されし二氏の好
意を謝す。

辰年七月(明治十五年)

編者識

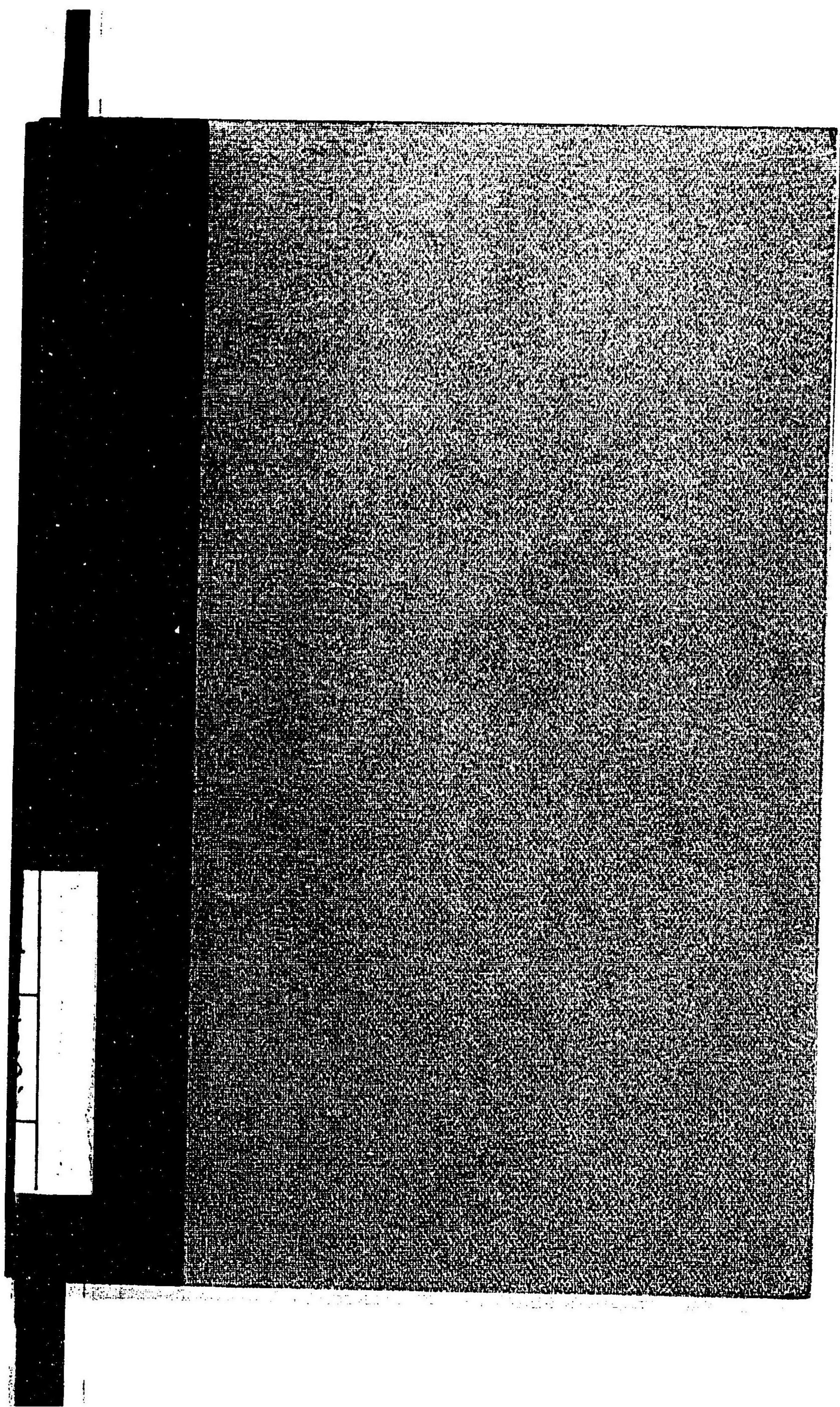
中一版
三二版

自取明弄殿百人上稿

を合刻

中四版

자 K-13



今宮の心中
卯月の潤色

国立国会図書館

912.4

Ti238i2



088188-000-9

912.4-Ti238i2

今宮の心中・卯月の潤色

近松 門左衛門/著

M25

DBI-0011

